

TOKUMA NOVELS 本格警察推理

笹沢左保

Sasazawa Saho

真犯人

ホ

シ

ボ



## TOKUMA NOVELS

笹沢左保

ホンボシ  
真犯人

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ一六 郵便番号一〇五―五五

電話三五七三・〇二二

振替〇〇―一四〇―〇四四三九二

© Saho Sasazawa 1996

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 加々見正史〉

ISBN4-19-850350-8

TOKUMA NOVELS 本格警察推理

笹沢左保

Sasazawa Saho

真犯人

ホ

ン

ボ

I313.45  
J9063

ISBN4-19-850350-8

C0293 P800E (0)

定価＝800円(本体＝777円)



1910293008005



ホンボシ  
**真犯人**  
ささざわさほ  
**笹沢左保**

四百冊執筆の偉業に向けて日々ペンを走らせる笹沢氏。先日、出身地である横浜にて久しぶりに同窓会に出席。かの横浜空襲をくぐり抜けた面々の結集だっただけに、再会の感慨も一入だったとか。束の間の休息ともいえる出来事は氏の英気を養ってくれたことだろう。

TOKUMA NOVELS



本格警察推理

真<sup>ホン</sup>犯<sup>ボ</sup>人<sup>シ</sup>

世沢左保



心間書店

TOKUMA NOVELS



目次

|        |     |
|--------|-----|
| 死者は瓜二つ | 7   |
| 花の咲く遺言 | 49  |
| 尻を叩く女  | 91  |
| アリバイ成立 | 133 |
| 死にたがる女 | 175 |

本文挿画・柳澤達朗

死者は瓜二つ



# 1

井戸吾郎警部は、夢を見た。

夢とはもと不思議なものだが、どうしてあのような夢を見たのか井戸警部にはわからない。もちろん、正体不明の人間ということではなかった。

だが、名前も知らないし、口をきいたこともない女であった。そういう女が、夢の中に出現したのである。ただ黙っていて、行動することもない。

夢に見る必然性のない女が脈絡もなく不意に夢の

中に現われて、何も言わずに間もなく消えてしまった。ああいうのを夢枕に立つと表現するのかと、井戸警部はいささか気になった。

現在の井戸吾郎は、警視庁捜査一課の強行犯捜査八係の係長というポストについている。だが、六年前の井戸吾郎はまだ、中央南署の刑事課にいた。井戸の階級も、警部補であった。

その日、東京駅の八重洲口の近くのホテルから、若い女の宿泊客が浴室で死んでいるという一一〇番通報があり、所轄の中央南署で調べることになった。井戸吾郎も、ホテルへ急行した。

若い女は前日の夕方にホテルを訪れて、八五〇号室の客となった。八五〇号室はツインの部屋だが、女のほかに誰かが泊まった形跡はない。

若い女はフロントで、一泊だけと明言している。それにもかかわらず、翌日の午後になっても八五〇号室の客はチェックアウトをしなかった。

午後三時から三十分間、フロントは八五〇号室へ電話を入れる。だが、応答はない。午後四時になって客室係とフロントマネージャーが、マスターキーを使って八五〇号室へはいった。

そしてバスルームで、客が死んでいるのを発見した。客は荷物らしい荷物を、持っていないかった。バッグのほかに、所持品がゼロであった。

バッグにしても、中身は二万円入りの財布、ハンカチ、ティッシュペーパー、それに口紅だけであった。ほかに多分、果物ナイフが入れてあったものと

思われる。

若い女の客は、果物ナイフで心臓をひと突きにするといふ壮絶な死を遂げていたからである。果物ナイフは、ホテルの備品ではない。この客は一度も、ルームサービスを頼んでいないのだ。

果物ナイフは、客が持ち込んだものである。バッグの中に、忍ばせてあったのに違いない。若い女は初めから死ぬつもりで、ホテルの客になったのだらう。つまりホテルに、死に場所を求めたのであった。

女はバスタブに湯を張り、何ひとつ脱がずに身体を洗めている。スーツ、ブラウス、ブラジャー、下着、パンティーストッキングも身につけたままだった。例外は、靴だけということになる。

湯の中で、果物ナイフを心臓に突き立てたのである。死亡推定時刻は、前夜の九時より前という結果が出た。女はホテルにチェックインして、数時間の

うちにあの世へ旅立ったのであった。

バスタブの中の水は、真つ赤に染まっていた。果物ナイフは深々と、心臓を突き刺したままになっている。即死状態のせいか、苦悶した様子はない。

女の顔は、透き通るように白くなっていた。マネキン人形を、連想させる。髪の毛は、セミロングである。井戸吾郎は、死者の顔をしみじみと眺めやつた。

安らかに、眠っているように見える。清らかで、美しかった。目をつぶっているのも、自然に感じられた。二十代半ばとすれば、若い女には違いない。しかし正確には、年齢不詳ということになる。

それにしてもなぜ、浴室のバスタブに湯を満たし、その中で死を遂げたりしたのか。そのことについては、これ以上ホテルに迷惑をかけまいとする心遣いだったと推察された。部屋の絨毯じゅうたんや壁を、血で汚

さないようにしたのだ。

浴室内であれば、血は簡単に洗い落とせる。実際は湯の中で心臓を突き刺したため、浴室の壁にも血は飛び散っていなかった。死者にはそうしたギリギリの分別が、働いたものと思われる。

部屋のドアには、チェーンによるロックがなされていた。チェーンを切断したのは、フロントマネージャーの指示を受けた客室係だった。

それまでの八五〇号室は、完全な密室状態にあってたのである。何者かが、出入りした可能性はない。したがって、他殺ということはあり得なかった。

遺書はないが、自殺と断定された。自殺ということとで、刑事課の出る幕ではなくなった。この自殺騒ぎは、刑事課の井戸吾郎たちの手を離れたのであった。

だが、井戸吾郎にしても気にはなる。それで、そ

の後も自殺した若い女について、何か情報があれば真剣に耳を傾けた。ただし、井戸吾郎たちを安心させるようなニュースは、一向に聞こえてこない。

いつまでたっても、身元不明のままなのである。

ホテルの宿泊カードにあった住所も名前も、実在しなかった。身分が明らかになるようなものは、何ひとつ所持していない。死者が身にまとっていた衣服は、全国で市販されていて、買った人間を特定することは不可能だった。

靴、バッグ、財布、口紅、ハンカチ、果物ナイフなども同様であった。死者の身体に傷跡、手術の痕跡、珍しいホクロやアザといった特徴も認められなかった。

身元を調べる手がかりが、まるでない。東京、関東、中部、東北地方では新聞の記事になっている。その他の手段でも、広報に努めた。

しかし、ついに反応はなく、家出人や行方不明者にも該当しなかった。完全に、身元不明であった。死者は無縁仏として、都営の霊園に納骨された。

「日本人が、日本で死亡したんでしよう。それなのに身元がわからないっていうのは、何とも不思議ですね」

「背筋が、寒くなる」

井戸吾郎と刑事課長は、そんなふうに話し合った。「肉親、親類縁者、友人、学校の同級生、先輩後輩、勤め先の同僚や上司、近所の人たちと、彼女を知る人間はかなりの数だと思いますよ」

「そういう人たちが、ひとりとして彼女の死に気づいていない」

「偶然、そうなるんですかね」

「そうだな。たまたま、彼女の死に関する情報に誰も接していないとか……」

「しかし、自殺したんですからね」

「自殺には原因があり、原因は人間関係から生ずる」

「彼女の自殺に何らかの形で、かわりを持っている人間だったら、気がつくんじゃないんですか」

「自殺はともかく、行方不明になったことには気づくだろうな」

「どうして、そのことを警察に届け出ようとしなかったのか」

「都合悪いことがあれば、届け出ないで沈黙を守るさ」

「そうだとしたら、薄情を通り越して冷酷ですよ」

「彼女は永久に、無縁仏でいなければならぬんだからな」

「彼女も、浮かばれませんよ」

「むなしいね」

「やりきれなくなります。こういうことがないように、国民全部が指紋を登録すればいいんですがね」

井戸吾郎は、長く吐息した。

「自殺者の中には、身元をわからなくしたがる例が少なくないしね」

刑事課長は、井戸吾郎の肩を叩いた。

この直後に井戸吾郎は抜擢されて、本庁の捜査一課に勤務することになった。そうしたこととあつて、井戸吾郎の脳裏から身元不明の自殺者の記憶が、次第に薄れていったのである。

四年後には、警部に昇進する。去年になって急に係長に欠員が生じたことから、またしても井戸警部には幸運がもたらされる。井戸警部は四十歳で、強行犯捜査八係の係長の椅子にすわったのだった。

ところが昨夜、夢の中に突如として彼女が現われた。Xとしか呼びようのない彼女は、夢の中でもた

だ黙って立っていた。時間にして、十数秒だろうと思われる。

Xは消えてしまい、別の夢に移っていた。Xの服装などは、いっさいわからない。だが、目が覚めてからもXが夢に現われたことは、はっきりと記憶している。

今日、出勤した井戸警部は記録室へ、足を向けずにいられなかった。井戸が手にしたのは、身元不明死体票であった。これには警視庁管内で死亡したうえ、いまもって身元が明らかにならない無縁仏の記録が、残らず集められている。

Xたる彼女のカードを、井戸は見つけ出した。六年ぶりの対面だが、井戸はXの死に顔しか知らないのだ。発見されたときも、この記録の写真でもXは死体でいる。

そんな彼女がなぜ、井戸の夢の中に登場したのか。

井戸は五年以上、彼女のことを思い出してもいないのだ。それなのにいきなり、彼女は井戸の夢の中に現われたのである。

夢の中のXは、生きていたような気がする。表情は動かず無言であったが、Xは目を開いていた。Xは夢の中で、井戸のほうを見ていたように思えてならない。

しかし、現実のXは死者であり、いまだに身元不明なのだ。死後六年が経過しているのに、なお身元がわからないとなると、今後も絶望的といえる。

何とかしたくても、可能性はない。Xが先祖代々の墓に葬られるチャンスは、永久に失われたのである。Xは未来永劫、無縁仏でいなければならない。美人だったと、井戸警部は思う。それだけに、Xが哀れになる。同時にXの夢を見たことに、井戸はこだわらずにいられない。安らかに眠ってくれと、

井戸は死体票のXの写真に手を合わせた。

井戸は、捜査一課の大部屋に戻った。大部屋は強行犯捜査三係から九係までの総勢八十人が、同居しているブロックだった。井戸警部は藤波管理官の席に寄って、昨夜の夢の話を持ち明けた。

「どうしてなんですかね」

井戸は、首をかしげた。

「二、三十年前の知り合いが、日ごろ思い出したこともないのに、ひょいと夢に出てくるのは珍しい話じゃない」

藤波管理官は、そう答えた。

管理官というのは、捜査一課長と各係長との中間のポストであった。管理官は係長に、日常の指示を与える。事件が発生すれば、管理官が直接の捜査責任者となる。

係長を経験している捜査のベテランで、階級は警

視だった。捜査一課の顔ともいえるべき管理官二人が、強行犯捜査係を掌握している。殺人事件を、輪番制で担当する。

「別に、夢枕に立ったってわけじゃないですが」

井戸は、無理に笑った。

「そいつは、わからんよ」

藤波管理官は、真剣な面持ちでいる。

「被害者が夢枕に立ったってこと、管理官にも経験がありますか」

「いや、被害者が夢枕に立って犯人を教えてくれたなんてことは、一度もなかったんじゃないかな」

「そりゃあ、そうでしょう」

「だけど、ホトケさんが教える、ホトケさんが知らせる、ホトケさんが呼ぶってことはあるだろう」

「それは、よくあります」

「夢に現われた身元不明の自殺者も、きみに何やら